

## 本校高等部普通科の作文指導

～論理的思考力の育成と表現力の向上をめざして～

鈴木 牧子

本校高等部普通科国語科では、これまで全国高校生読書体験記コンクール（公益財団法人一ツ橋文芸教育振興会主催）及び全国聾学校作文コンクール（公益財団法人聴覚障害者教育福祉協会・全国聾学校長会主催）に生徒作品を毎年応募してきた。両コンクールに向けて生徒全員に作品を書かせ、校内選考入賞者の作品を応募するという形を取ってきた。今回は、まずその取り組みにおける「作文の評価の仕方」「指導の柱（観点）」等について報告する。また、高等部普通科の授業において行った作文や小論文の指導事例を分析し報告する。その上で、高等部段階における文章表現の指導をどのように進めていくべきなのかを考察する。

キー・ワード：読書体験記及び作文の評価 作文指導 小論文指導 論理的思考力 表現力

### 1 はじめに

本校高等部普通科国語科では、「作文指導」の一環として、「全国高校生読書体験記コンクール」と「全国聾学校作文コンクール」への応募を継続してきた。読書体験記については、30年以上応募を継続し毎年入賞している。「全国聾学校作文コンクール」は、第1回から応募を続けこちらも毎年入賞している。国語科教員としては賞を取らせることを目的にして取り組ませているわけではないが、文章を書くことに対する生徒の意欲づけ、自信につながっていると考えている。

### 2 応募作品の選考及び指導について

#### (1) 校内選考

両コンクールに応募する作品については、まず全員に書かせた上で、校内コンクールを実施して、国語科の教員による選考を行っている（聾学校作文コンクールについては担任の協力も得ている）。

#### (2) 選考の観点

文章の巧拙だけを見て選考しているのではなく、主に以下の二つの観点で選考を行っている。

- 直接経験や読書等の間接経験をしっかり見つけ、的確な分析ができているか。
- その分析をもとに、自分なりに一般化（抽象化・普遍化）した概念や主張が書かれているか。

#### (3) 応募作品の指導

国語科教員で担当生徒を決め、生徒個々に応じた指導を行っている。応募までは、生徒の経験談、本の内容、本のどこに感動しどんな影響を受けたかなどを徹底的に話し合い、書きたいことの焦点化を図る。たとえて言うならば、教師による取材活動をまず行うのである。教師側も本人の経験を分析し、どうしてそう考えたか、考えがどんなふうに変化したかなどを、想像力を駆使しながら聞き出すようにしている。その過程で本人の思いや主張を明確化させ、数回の書き直しをさせる。さらに、文章の構成や表現等も吟味させ清書をさせる。作品が完成すると、生徒は自分の書きたかった思いが書けたという達成感を持つようである。

#### (4) 応募の結果

##### ① 全国高校生読書体験記コンクール

本校高等部国語科では、昭和60年からこのコンクールに応募するようになったが、平成1年から平成30年まで連続して千葉県優秀作品5編に入選している。また、第38回までのコンクールにおいて優良賞（千葉県第1位）に入賞した回数は24回である。優良賞の作品は、中央選考（全国の優良賞受賞作品47作品のコンクール）の対象になる。中央選考においては、文部科学大臣奨励賞（全国1位）を3名（平成15年・17年・24年）、全国高等学校協会賞（全国2位）を3名（平成4年・14年・28

年)、一ツ橋文芸振興会賞(全国3位)を3名(平成2年・8年・10年)の生徒が受賞している。

## ② 全国聾学校作文コンクール

平成17年度から聾学校作文コンクールが始まったが、第1回～第14回までのコンクールに毎年3名の作品を応募してきた。これまでに、金賞を9名、銀賞を10名、銅賞を7名、努力賞を5名、佳作を4名の生徒が受賞している。

## 3 日常の作文(文章表現)の指導

筆者は、全国高校生読書体験記コンクール及び全国聾学校作文コンクールの指導を通して、「具体的な経験(直接経験や間接経験)からどのような考えを持つようになったか、考え方がどう変化したか」ということを、じっくり見つめて長い文章にまとめさせる活動が生徒の心の成長を促すきっかけの一つになると考えた。

しかし、聾学校高等部の生徒にとってまとまった一つの思いや主張を1500字あるいは2000字の長い文章にまとめ上げることは、そう簡単なことではない。そういう活動がスムーズに行えるようにするためには、少なくとも、a身の回りを観察する力、b論理的思考力、c表現を工夫する力という三つの力が身につけていなければならない。

これらのa～cの力のうち、aについては、幼少期から指導が積み重ねられていると考えられる。したがって、聾学校高等部段階で特に磨きをかけたいのは、bとcの力である。本報告では、aの力を意識しつつも、b、cの力が身に付くように実践してきた指導を紹介する。

### (1) 具体化力の育成

「具体化力」とは、抽象的な事柄にどのような具体例があるのかを見つける力のことである。文章を書く際に、具体的にどのような例があるのかを示すことによって、わかりやすさや説得力が生まれる。また、文章を読む際も具体例を正しくとらえることによって、文章全体の意味を的確に把握できるようになる。具体例を見つけ出す力は、読み書きをする上で大事なものである。そこで、下記

のような教材を使用し、抽象的な表現から適切な具体的事例を考える練習を行わせた。

問1 ( )の中に、「こわがりだ」を説明する具体的な例を入れて、文を完成させなさい。( )の中に入れる言葉は、三種類以上あげられるよう、頑張ろう。

私の弟は、( )ほど、こわがりだ。

答え ○お化け屋敷に一人では入れない  
○夜、一人で眠れない  
○ほえる犬がいる前を通れない

問2 問1と同じパターンで問題を解こう。( )の中には具体例を三種類以上考えて書くこと。

- ・私は、( )ほど、犬が嫌いです。
- ・教室の中は、( )ほど、うるさかった。
- ・野球の試合では、( )ほど、緊張した。
- ・花火大会は、( )ほど、人でいっぱいだった。
- ・佐々木君はとても足が速い。たとえば、( )くらいである。
- ・90歳になる私の祖父はとても元気だ。たとえば、( )くらいである。

これらの問題では、各文の傍線部の「こわがりだ」「犬が嫌いです」「うるさかった」「緊張した」「足が速い」「とても元気だ」について、読んだ人がイメージできるような具体例を入れさせるようにした。生徒はこつがわかってくると、様々な例を出せるようになった。個々の生徒の解答について適切かどうか話し合う活動にも積極的に取り組むことができた。このような思考パターンに慣れてきたら、下記の問3のような難易度の高い問題に取り組ませるようにした。

問3 ( )の中に適切な具体例を書き入れて文を完成させよう。

最近( )。これは地球温暖化のせいらしい。

生徒への教示→地球温暖化とは、石油などの使いすぎのために大気中の二酸化炭素が増えて、地球の気温が上がることを言う。このことによって起こる具体的な事例を考えよう。

答え→南極や北極の水が溶けて世界中の海拔の低い土地が水没している、日本では、夏に猛暑日が多くなっている等。

このような学習を行うことによって、生徒は抽象的な事柄に含まれている具体例を見つけ出すこ

とができるようになる。そしてそういう力を、評論等の読解で筆者の考えを把握する際に役立てることができるようになる。さらに、「具体例を入れて説得力のある文章を書く」ということがどういうことなのかを理解できるようになる。

## (2) 抽象化力の育成

具体化する学習が終わったら、次は抽象化する学習を行う。抽象化力とは、具体的な事柄から、あるまとまった意味を取り出し一般化する力のことである。この力をつけると、文章を書く際に、どのような具体例を出して、それをどのようにまとめればよいのかが理解できるようになる。また、文章を読む際にも、具体例にどのような意味があるのかを理解できるようになる。指導例を以下に記す。

問1 ( ) の中に当てはまる言葉を考えて、文を完成させよう。( ) の中に入れる言葉は三種類以上あげられるよう、頑張ろう。

あの人は、何を見てもこわがって、いつもびくびくする。つまり、あの人は( )。

答え (こわがりだ) (臆病だ) (弱虫だ) (気が小さい) (気が弱い)

私のおじさんは、自分の意見をどこまでも主張する。自分の間違いに気づいたとしても、意見を変えたことは一度もない。つまり、おじさんは、( )。

答え (頑固だ) (意地っ張りだ) (意固地だ) (融通がきかない)

問2 次の(イ)～(ハ)の三つの文章が表す状況には、共通点がある。その共通点とは何か。

- (イ) 数学の先生が、簡単な計算をまちがえた。
- (ロ) テレビでプロ野球を見ていたら、守備のうまい選手が、なんでもないフライを落とした。
- (ハ) 料理上手な母が、煮物を焦がしてしまった。

共通点 その道に秀でた人が、珍しく失敗してしまった。  
ことわざ「猿も木から落ちる」「弘法も筆の誤り」

抽象化力育成の指導では、言葉や文だけではなく、絵や漫画を使った指導も行った。Fig. 1 は、電車の中刷り広告であるが、二枚の絵の間にある「同じくらい危機」の語句は消して、「二枚の図」の何が同じなのかを考えさせる問題に取り組ませた。

問3 このポスターは「スマホを見ながらの『ながら歩きはやめましょう』」ということを伝えるものである。二枚の絵の真ん中に「= (いこーる)」があるが、この二枚の絵の何が同じなのか、考えて答えよ。



Fig.1 電車の中刷り広告

この問題は、本校高等部普通科の習熟度別学習グループの下位のグループに所属する生徒に取り組ませたが、非常に興味を持って取り組んでいた。「猛獣と電車では、違う絵だが何が同じなのか？」という発問をすると、「絵の意味が同じ」「どちらも危ない」という答えが返ってきた。その後、『危険の種類』は違うのではないかと尋ね、「危険の( )が同じ」と板書すると、「危険の度合い」「危険のレベル」という答えが返ってきた。

非常に単純な問題ではあるが、ポスターの絵の意味が書かれていない状態から、その意味を取り出し言葉で表現するという、抽象的思考を促す基本の学習をすることができた。

次に四コマ漫画を使った指導について述べる。



Fig.2 四コマ漫画(抽象化力育成の教材)

Fig. 2 の四コマ漫画と、下記の文章を読ませ、「青春のトライアル」の主人公の男の子(一郎君)の考えていることと、医学博士の春山氏の考えているこ



との共通点は何かという課題に取り組ませた。

次の文は、ある医学博士が書いた文章です。

最近アメリカからIQ200という、とてつもない天才児が来日し話題になりました。日系三世の少年の母親は、妊娠中に納豆を食べまくっていたそうです。また少年自身も小さいときから大の納豆好き、いまでも毎日欠かさないようにしているとテレビで紹介されていましたが、納豆が脳細胞の活性化に役立つことを示す、生きた見本といってよいでしょう。

(『脳内革命』 春山茂雄著)

表現様式や述べられている内容が異なっているため、生徒は「どちらも同じ理屈(論理)が使われている」ことに気づき抽象化するということが難しかったようである。そこで、四コマ漫画と春山氏の考えの骨子をまとめて、下記のように板書し、やりとりをしながら考えさせた。

#### 青春のトライアル

- ① 背の高い人がいる。
- ② その人はトリの唐揚げ等を食べている。
- ③ それを食べれば背が高くなる。

#### 春山博士

- ① 頭のいい人がいる。
- ② その人は納豆を食べている。
- ③ それを食べれば脳細胞が活性化される。

生徒からは様々な意見が出たが、話し合った結果、「一人のノッポと一人の天才が食べているというだけの理由で、その食品に効果があると考えている」という共通点を導き出し、抽象化することができた。

この抽象化力を育成することは簡単なことではないが、発達段階に合わせてやらなくてはならない学習だと思われる。この力が身に付いていないと、作文や小論文で、具体的な経験から自分が考えたことや自分の主張がきちんとまとめられないからである。

### (3) 図表や文章の問題点を発見する力の育成

この学習では粗が目立つ図表や文章を提示し、そこに理想からかけ離れている部分や矛盾している部分があることに気づき、それらに関して「～だから……するのはおかしい」「～(する)ために

は……(する)必要がある」というように、論理的に指摘する力を養うことを目標にしている。実際の学習では、十分な集客ができなかった文化祭模擬店のポスター、杜撰な旅行計画書、入試の合格レベルに達していない自己PR書など様々な情報を提示して、問題点や改善点を話し合った。

以下に紹介するのは、十分な集客ができなかった文化祭模擬店のポスター (Fig. 3) について検討した学習である。

今日は文化祭。山田君達のクラスは、模擬店を開きます。下図のような手書きのポスターも作って、西門の所に貼り出してもらいました。食材もたくさん用意して、お客さんが来るのを張り切って待っていました。ところが、文化祭に来たお客さんはいつもの年より多かったのに、山田君のクラスの模擬店には、思ったよりもお客さんが来てくれませんでした。山田君たちはがっかりしていました。

さて、何が良くなかったのでしょうか。ポスターから考えられる、お客さんがあまり来なかった原因を考えなさい。

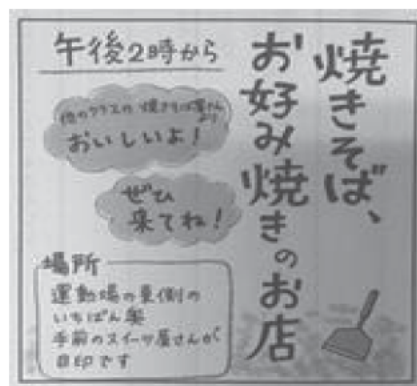


Fig. 3 文化祭のポスターの不備を見つける学習

この課題に対する生徒の解答を下記に記す。生徒はこの模擬店実施に当たった問題点と、ポスターの書き方に関する問題点を指摘していた。

- 昼食時に売るには時間が遅すぎる。早めに午前10時に開店した方がいい。
- 場所が良くない。午後2時開店だと、手前のスイーツ屋に寄る人が多いのでは?
- 模擬店を開いている学年やクラスがわからない。保護者も来るだろうから、誰が模擬店をやっているのか書いた方がいい。
- 場所の説明がわかりにくい。  
→地図を書いた方がいい。
- 値段が書かれていない。

- 「ふわっとろのお好み焼き」「野菜たっぷりの焼きそば」「ぜひ来てね」「美味しいよ」などの誘い文句（キャッチコピー）がない。
- 他の模擬店にはないアピールポイントを書いたほうが良い。
- 絵は「へら」だけでは伝わりにくい。  
→絵をお好み焼きや焼きそばに変えたり、写真に変えたりして、美味しそうな雰囲気を出すべき。
- 縦書きか横書きが統一されていない。どちらかに統一すべき。
- 重要な情報が一目でわかるようなポスターではない。→文字のフォントや色、量を考えるべきである。

このような学習を行うことで、身の回りの出来事や社会的事象に対して論理的に思考することができるようになっていくと考えられる。

このパターンの学習に慣れてきたら、論理的に正しくない文章や情報が歪められている文章などを読ませて、問題点を指摘したり反論したりする学習をさせるようにしている。下記は、その教材の例である。

次の文章はサンプリング調査に関する事例である。調査の方法や結論の出し方などに問題点があれば指摘せよ。

C市の小学1年生から6年生を学年ごとに無作為に50人ずつ（合計300人）選んで、「足の大きさ」と「知っている漢字の数」を調査した。その結果、「足が大きい児童ほどたくさんの漢字を知っている」ことがわかった。そこで、「C市の児童においては足の大きさが知能に関係する」と報告書に記述した。

（岡山大学経済学部 後期入試問題より）

この問題は論理的思考能力が試されている問題だと考えられる。それほど難しくない問題だと思い取り組ませてみたが、意外に手こずってしまう生徒がいた。ほとんどの生徒が「知っている漢字の数が多＝知能が高い」という判断はおかしいという点を指摘できていたが、調査の方法に問題点があることをきちんと述べていた生徒は少なかった。「調査対象はこれでいいのか、学年が上がったら知っている漢字は増えるのではないか」という発問をして、気づかせることができた。「調べる目的に合わせて、条件を統一しなければ信頼できる結果を得ることができない」ということを理解させるためには良い教材だ

った。

#### (4) 二人ディベート（紙面ディベート）

小論文の指導の導入で行う指導である。小論文では自分の意見を一方的に書いても、読み手を納得させるのは難しい。読み手の持つ反論を想定して文章を書かなくてはならない。その練習として、二人ディベートを行う。つまり、「あなたはそう思うかもしれないけれど、私の意見はこういう面であなかに勝る」という根拠を伴った書き方に慣れる学習である。一切話さず、全て紙面の上だけで討論するのである。討論が終わったら、その紙面を他の生徒が読み、ディベートの勝敗を決める。

下記は、筆者と生徒が行った二人ディベートの内容である。この授業の時は、生徒の人数が奇数だったため、生徒1名については筆者と二人ディベートを行った。

**テーマ 二十歳を過ぎたら一人暮らしをすべきである。**

肯定側（生徒） 否定側（鈴木牧子）

【鈴木】一人暮らしは全て自分の自由にできる。誰かの都合に合わせることをしないので自分勝手になる。心の成長はない。

【生徒】確かに自分の自由にはできる。しかし、自由とは自分で全て決めた上で行動するということになる。家事全般は自分でやらないといけないため生活面は良くなる。

【鈴木】家事全般を自分でやるとは限らない。食事は調理されたものを買えば良い。掃除も洗濯もやらなくても注意されないから怠けがちになるはず。

【生徒】やるかやらないかは本人の自由である。だが調理されたものは栄養分が偏っており、毎日食べると健康に悪い。掃除・洗濯は菌等が発生しない為に必要である。長生きしないつもりならどうぞ。

【鈴木】自分一人のためにきちんとできる人は少ない。人は誰かと一緒に（家族など）にいて、自分以外の人の為ならきちんとやれると考えるもの。自分一人のことなどどうでも良いと考えるのが普通だから、適当な性格になり、人としての成長を促すことはできない

【生徒】確かに自分一人の事などどうでもいいと思うだろう。だが一人暮らしをする時は大抵アパートやマンションが多い。隣人トラブルを防ぐために何かを考えている。一人暮らしでも常

に周りのことを考えるのである。

【鈴木】あなたの言っている隣人トラブルというのは、まさに一人暮らしの人が成長していない証拠。一人暮らしをしているからこそ、自分の事しか考えなくなってトラブルが起こるのだ。だから人としての成長は望めない。

【生徒】隣人トラブルは確かにある。だが、一人暮らしの人に隣人トラブルが多いとは限らない。家族でもある。それに、失敗をすることで学べるものもあるのだ。成長していない証拠ではなく、成長するチャンスだと思う

【鈴木】人間は一人で生きていけないのである。家族や仲間と共について、刺激し合ったり助け合ったりして成長し、共に幸せに暮らすべきもの。一人暮らしはそういう面での刺激が少なく、独善的になりやすい。

【生徒】確かに人間は一人では生きていけない。だが家族や仲間とはいっかは離れる。そういうときに困らないよう、自立する練習が必要だ。人間には、別れがつきものである。

【鈴木】自立する練習は一人暮らしでなくてもできる。社会人として組織の中で働いたり、家族の一員としての役割を果たしたりする中で人としてやらなければならないことを知り、やり遂げる力を身に付けるのである。一人暮らしだとそこまで頑張る必要はないのでやはり成長なし。

【生徒】一人暮らしが100%無駄になる事はない。全力で頑張る必要はないが、頑張らなければならないことが多い。やはり成長する機会なのである。

ディベート終了後、各ペアで行ったディベートの内容を読み合い、批評と共に勝敗を決める活動を行った。この事例の生徒の批評は次の通りである。

○お互いの隙を狙って鋭い意見が飛び交っている。隣人トラブルというワードが上がっているが、【生徒】は「隣人トラブルを防ぐ」ために、人が気を遣うのであると述べている。自分の言動に全て責任を持たねばならないため、トラブルが起きないように周りへの配慮が欠かせないと言う意味だろう。そうした面で人として成長できるというのはうなずける。しかし、【鈴木先生】は「トラブルが起こるのは人が成長していないからだ」と述べているが、その部分にズレがあるのではないかな。（鈴木が意図的に論理をすり替えた部分に気づいている）→勝者（生徒）

○【生徒】の反論が弱い気がした。掃除、洗濯をしなくなる、という意見に対し、「長生きをしないつもりならどうぞ」や「掃除洗濯は菌が発生しないように必要」など、論点がずれた感じが否めな

い。全体的に押されまくった生徒は、自分から攻めの姿勢に転じたほうがおもしろそうだ。→勝者（鈴木先生）

○【鈴木先生】は「心の成長を促せない」と一貫した主張を述べ続けている。それに対して生徒は、最後のほうに「別れはつきもの」「頑張らなければならない事が多い」と述べている。この意見をもうちょっと具体的に広く述べればよかったと思う（最初の方で）。→勝者（鈴木先生）

○【生徒】は「確かに」と相手の言うことを認めがち。もっと一人暮らしをして良い面を持ち出し、相手からの反応を弱めるべし。鈴木先生はやはり経験が長い。鈴木先生の発言は経験をしているからわかることを述べている。

→勝者（鈴木先生）

このように紙面で行うディベートであれば、やりとりの記録が正確に残っているため、生徒は論理展開についてきちんと批評ができる。筆者が思っている以上に、生徒はきちんと読み込んでいた。筆者が無理矢理自分の有利な展開に持っていこうとしたところを指摘する生徒や、また、相手の論理を逆手にとって自分の有利な論理展開に持っていく方法に気づいた生徒がいた。

### (5) 構成を意識して書く力の育成

本校普通科の高3の学校設定科目に「小論文演習」という科目があるが、定期試験の際に、事前に出題内容を知らせて取り組ませる試みを行っている。生徒にとっては、出題内容に関して書籍やインターネットで調べ、自分の意見を明確にしておくことが試験勉強になる。

試験では「問題提起（話題提示）→意見表示（「確かに」「しかし」という譲歩のパターンを使う）→展開（意見の根拠）→結論」という構成にしたがって的確に自分の主張を書く、ということを要求している。したがって、生徒は、自分の情報や主張をどのように整理するかを必死に考えることになる。その活動こそが文章構成力すなわち表現力を高めることにつながると思っている。

以下に、試験問題と生徒の解答を紹介する。



**試験問題**

歩道や駅などには視覚障害者の歩行を助けるための点字ブロックが設置されている。しかし、この点字ブロックの使用に関しては様々な問題点が指摘されている。それらの中から一つの問題点を取りあげ、あなたの考えを600字以内で述べて（9割以上の字数、つまり540字以上で書くこと）。

★この小論文では、次の内容を必ず書くこと。

**序論**

- (1) 点字ブロックの定義（誰が、何の目的で、どんな場所で使用するものか）。  
自分が取り上げた問題点とは何か（具体的にどのような問題が起きているのか）。  
それについての意見（どう考えるか）の表明  
→「大きな問題だ」「放置しておくわけにはいかない」など。

**本論**

- (2) (1) で取り上げたことについて、なぜそれが問題なのかを示す。  
(3) 問題の原因・背景を具体的に示す。

**結論**

- (4) 問題点を解決するための方策・配慮

★段落構成は、三段落から四段落。

★原稿用紙の使い方、文体の統一、書き言葉で表現すること等、基本に留意して書くこと。

**【生徒の書いた小論文】**

目が不自由な人の歩行を助けるための点字ブロックは床や地面に設置されているが、この利用に関して様々な問題点が指摘されている。その中で私は点字ブロックの上に障害物を置くことについて大きな問題だと思い意見を述べたい。

確かに点字ブロックの上に障害物を置くことについて問われれば、置いてはいけない、事故を招く、などと大抵の人が答えるだろう。しかしそれは故意にやってはいけないという認識から来ている。何気ない日常生活の中で意識していないことの表れだ。自転車を歩道の脇に駐輪する人をよく見かけるが涼しい顔で駐輪している。少しでも点字ブロックと重なっているその自転車が、視覚障害者の転倒などの事故を招くきっかけになり得ることに気づけない。何も見えない場所で転倒する恐怖を味わったことがないとしても、その恐ろしさを想像することができるだろう。視覚障害者の立場に立って考えない人のなんと多いことか。この問題は点字ブロックの上に障害物を置くことだが、それ以前に私たちの見方、考え方に問題があると思う。

今後このような問題を起こさないためには、私たちの視覚障害者に対する見方考え方を改め、彼らの声を聞く必要がある。そしてその意見を実現でき

るように世の中に訴え、社会を変えなければいけない。一人一人が自分の行動を改め彼らの立場に立つことでお互いに思いやる社会にしていけるべきだ。

この形式の試験を行った後は、小論文を書く際の取り組み方に変化が見られる。書き始める前に、構成メモを作って書くようになる。生徒によっては文章の構成力を身につけ、非常にわかりやすい小論文を書くようになる。また、文章構成力が身につくと、内容の検討に時間をかけられるので、できあがる作品にも深まりが出てくる。

文章の表現力向上のためには、「構成力」を身につけさせる指導も工夫していく必要がある。

**(6) 聾学校小学部児童の作文の批評**

この学習は、全国聾学校作文コンクール入選作品集に掲載された複数の作品（今回は小学部高学年の児童が書いた三つの作品）を読み比べ、「書いた児童の述べたいことが伝わっているか」「表現や構成がどのように工夫されているか」「どのように改善したらいいか」等の観点で考えたことを発表し合うものである。その上で作品に順位を決め、順位を決定した根拠を書く、さらに「良い作文とはどのようなものか」自分の考えを述べる、というレポートを課題に出した。

小学部生徒の作文を全員で批評し合う学習は、楽しく展開させることができた。素直に読み、文章のある部分を具体的に引き上げ、「気持ちがよくわかる」「臨場感がある」「もう少し詳しく表現しないと説得力がない」等、教師の予想以上に多岐にわたる批評を発表し合うことができた。以下に、教材で使った小学部児童の作品一遍と、それに対する批評(抜粋)を紹介する。

**題 わたしのどこがダメなのか**

見てくれない。だれも見てくれない。もうすぐドッジボールの試合が始まる。それなのに、みんなのポジションがまだはっきり決まっていない。早く決めなくてはと、キャプテンの私はあせっていた。

「みなさん、見てください。」

4年生の女子が二人ちらっと見て、またおしゃべりを続けた。まるで、私のことが目に入らなかったかのよう。少しいらいらしてきた。今度は前より強い声を出した。

「見てください。」

しかし、他の人も同じだった。どうして、キャプテンの私を見てくれないのだろう。

試合が始まった。ポジションがはっきりしていないから、みんなはあわてていた。どんどん当てられていく。

「ああ、もう。決勝トーナメントにいけなくなってしまう。」

試合は負けてしまった。くやしくてなみだが出てきた。でも、みんなはへらへらとおしゃべりをしていた。負けたのに、くやしくないのだろうか。

五月に、新キャプテンに指名された。その時、みんなを引っ張ることができるのか、私はとても不安だった。でも、キャプテンとして、チームをまとめ、みんなを引っ張っていこうと頑張ってきた。しかし、なかなかうまく進められない。みんなが私の言うことを聞いてくれない。わたしのどこがだめなのか、どうしたらよいかわからない。

試合を見ていた友だちが言った。

「チームワークがとても悪いね。もっとよくしないと勝つことはできないよ。」

「みんなが見てくれないからばらばら。どうしたらチームワークが良くなるかな。」

「ボールを取った時に、盛り上げてみたら。」

去年のキャプテンのT君は、だれかがボールをキャッチすると、すぐにガッツポーズで、「やったー。」と声をかけ、みんなを盛り上げていた。T君の笑顔にはげまされ、みんなの気持ちも盛り上がっていった。私もキャプテンになってから、やってみたことがある。でも、私が声をかけても、みんな無表情。私はくじけてしまった。みんなが見てくれないから、声をかけるのはもうやめようと投げやりな気持ちになっていた。

「もり上がる？声をかけて。」

T君に声をかけられ、みんなで心を合わせてがんばろうという気持ちになったことを、思い出した。チームワークが悪い原因は、みんなが見てくれないことではなかった。声をかけてみんなを盛り上げようとする気持ちが、私になくなっていたからなのだ。私のどこがだめなのか、答えが一つ見つかった。私からどんどん声をかけて、もり上げていこう。

「ドンマイ、ドンマイ。」

みんなが見ていなくても。笑顔で。

(平成 27 年度全国豊学校作文コンクール入賞作品集より)

#### 【生徒の批評：一部抜粋】

三つ目の作品 C は、上手くいけない理由を自ら省みて見つけ出すことの大切さを軸としたものである。現在形で気持ちを主張することで臨場感を出している点は良かった。読者も臨場感によって作者に共感できる点もこの作品ならではの利点だと思う。

しかし、逆に作者の心情変化となる根拠や、時制、場面転換の流れが非常にわかりにくかった。さらに作者の心情表現が少なく、作者の性格や特徴が把握できなかった点も残念である。先に述べた二つの作品と比べてこの作品は、時制の順がまちまちで読みにくいと

いう理由で私は三位にした。

この三編の作品に共通する点は、話の展開が急すぎるという所である。作文は、身近な事やそれを通して得た事や伝えたい事を読者にスムーズかつ分かりやすく伝えるために書くものだと思う。そして私達読者はこういう体験があったからこそ、どういふ変化を生じたのかという具体的な事がないと全体を把握できない。このことから良い作文とは、具体的な事があって、どういふ影響を与えたのかという筋が一番重要であると考えた。具体的といっても身近な事全部書き留めるのは難しいので、自分が最も印象に残ったことに重点をおいて考える方がまとめやすいかもしれない。さらに、時制や話の筋を整理したらより良い作文に近づけると思う。今回の作文三編にはそういった所が見られなかったので、まずは話の筋をはっきりとさせ、具体的な話と主張を上手く結び付けられることがより良い作文になるための一歩であるはずだと考える。

この指導を通して、表現力を高める指導の方法の一つとして、他の人間が書いた作品を批評する活動も有効だと実感した。他の人間の書いた作品を批評し合うことで、よい作文とはどのようなものか、どういふ書き方がいいのか等を意識できるようになるからである。無意識に思いつくまま書かせるだけでは作文は上手くはならない。よい作文のイメージをもたせたり、具体的な表現方法を意識させたりすることが必要である。そのためには、同級生や下級生など様々な人々が書いた作品を批評する機会を作らなければならない。そして、その際には素晴らしい作品だけではなく、課題のある作品を取り上げてみるということも必要だろう。

#### (7) 文法を意識させる指導

本校高等部普通科に進学してくる生徒は、中学部までに日本語の基本的な文法の学習を行ってきたが、習熟度は個人差が大きい。高等部では、本格的に古文・漢文の学習が始まることもあり、生徒が高1に入学した直後に集中的に日本語（現代語）の文法の復習を行っている。ただ、その学習も文法用語や用法の解説と確実に覚えさせることが中心になりがちである。古文の学習につなげるためなので、そういう学習も重要であるが、それだけでは無味乾燥になりなかなか定着しない。

そこで、様々なテキストや問題集から、教材を収



集・作成して、興味を持たせながら学習させるようにしている。たとえば助詞一つが異なるだけで、文の意味が変わってくる、ということに気づかせる教材などを使って、文法の面白さ、大切さを意識させる学習を少しずつ行っている。下記は、助詞の指導で使用した問題である。

問1 格助詞「を」「に」「へ」は、どれも場所（方向）を表すものだが、それぞれの格助詞を用いたときのイメージは違う。次のア～ウの俳句のイメージがどのように変わっていくか、答えよ。

- ア 米洗う前をほたるが二つ三つ  
 イ 米洗う前にほたるが二つ三つ  
 ウ 米洗う前へほたるが二つ三つ

問2 （松田聖子「赤いスイートピー」より）

ア なぜあなたが時計をちらっと見るたび泣きそうな気分になるの？

Q 泣きそうな気分になっているのは誰？

A 書いていないけど「わたし」。

イ なぜあなたは時計をちらっと見るたび泣きそうな気分になるの？

Q 泣きそうな気分になっているのは誰？

A （迷わずに）わたし。

Q なぜ、アとイは、助詞の「が」と「は」が違うだけで、意味が違ってくるの？

A 関係する動詞が違うから……？

問1では、アとイの違いを認識していない生徒が多かった。ウのイメージは比較的出来ていた。そこで、この三つの助詞の意味や用法を説明し、違いを意識させるようにした。

問2では、ほとんどの生徒が助詞「が」と「は」の違いを感覚的にとらえているだけだった。そこで、「が」と「は」の働きに違いがあること、「が」は、直後の述語に影響すること、「は」は遠く離れた述語にも影響を及ぼすことを簡単に説明した。

生徒が日本語の文法でどの部分につまずいているか、どの部分の知識が足りないのか等については、十分に把握する時間がないのが現状である。そこで、「日本語を学ぶ外国人がつまずく表現」などを参考にして、生徒が興味を持ちそうな問題を作成し、折に触れて取り組ませるようにしている。その上で、生徒の弱点を把握し、授業で取り上げたり問題練習をさせたりしている。高等部の三年間で日本語の文

法のすべてを網羅して指導することはできない。しかし、たとえば「助詞一文字でも異なると意味が違う」というようなことを意識させる学習を少しずつでも行っていけば、文法を意識して日本語を使う生徒に育てられるのではないかと考えている。

#### 4 まとめ

本校高等部の生徒の作文指導については、やや難しさを感じている。義務教育段階の継続的指導により、生徒にある程度「書く力」が身についており、学習意欲を高めるためには工夫が必要だからである。また、文や文章そのもののだけをあれこれ細かく指導しても、より良い作文や小論文が書けるわけではないという現実があるからである。

そこで筆者は、3の「日常の作文（文章表現）指導」の中で述べた通り、「考える」ための様々な学習活動に取り組みさせた。それは、生徒の思考を鍛えることが、内容のあるまとまった文章を書くことにつながると考えたためである。

学習活動の材料は、様々な書籍にあたり、生徒が興味を持ち一生懸命考えそうなものを選択した。また、自由な視点から批判的な思考ができるものを選択した。通常の教科書教材は、言語教材として一定の水準にあるものが選択されているので、今回のような学習には適さない。論理的にやや破綻しているもの、論理が飛躍しているもの、主張が曖昧なもの等、不完全な教材の方が、生徒はよく考えるのである。生徒が持っている知識やものの見方や考え方を総動員して、問題点や矛盾点を指摘する学習経験をさせることが、論理的思考力を育てる一助になるのではないかと考えている。

今後も教材を発掘あるいは開発して、「生徒の論理的思考を促し、文章を書かせる」という学習活動を継続していきたい。

生徒の文章表現力を高めるためには、「評価」も重要になってくる。教師による評価だけでなく、生徒同士で自分達の討論や個々の文章表現を客観的に見つめるという活動を授業の中に汲み入れると効果的である。なぜならば、文章を評価する観点が明確になり、それを意識しながら書く姿勢が生まれるから

である。

さらに、文章を書く意欲を高めるためには、外部機関で実施される様々なコンクールを上手く活用することも必要である。それらは、生徒の意欲づけや自信、あるいは自己の振り返りにつなげることができるからである。コンクールの主催団体によって制作される作品集も良い教材になる。生徒の気持ちを刺激しながら活用する方法を考えるべきである。

最後に教師による評価だが、書かれたものに対してできるだけ詳しく感想や批評を書くようにすることが大切である。また、書き直しをさせるときには、赤ペンを入れて指示するだけではなく、「生徒と十分に話し合い、伝えたい思いを明確にする、思いを的確に表す言葉を見つける」という手間を惜しまないことも忘れてはならない。「自分の力で納得のいく作品が書けた」という達成感を生徒に持たせることこそが、文章を書く力を伸ばすための基本だからである。

#### 〔付記〕

本研究は、平成 30 年（2018 年）第 52 回全日本豊教育研究大会において発表したものである。今回は、その発表原稿に詳細な指導事例及び考察を加筆している。

#### 〔参考文献〕

岩田道雄・田島伸夫編著（1985）中学国語の授業 1 時間ごとの授業展開と板書・指導のポイント, 68-83, 民衆社,

道田泰司, 宮元博章（1999）クリティカル進化論『OL進化論』で学ぶ思考の技法, ii - v, 162-165, 北大路書房,

樋口裕一（2000）樋口裕一の小論文トレーニング書かずに解ける新方式でいつでもどこでもパワーアップ, 164-173, ブックマン社,

細谷美代子（2010）初年次学生の「読み」に関する一考察, 筑波技術大学テクノレポート vol.17(2), 54-58, 筑波技術大学高等教育研究センター

樋口裕一・白藍塾（2015）クリティカル・シンキング エントリーⅠ, エントリーⅡ, ベーシックⅠ, ベーシックⅡ, 学研教育出版

前田安正（2017）マジ文章書けないんだけど 朝日新聞ベテラン校閲記者が教える一生ものの文章術, 38-55, 大和書房